

三中だより

令和6年度 7月号②



令和6年7月18日発行
荒川区立第三中学校
(学校通信 No. 6)
校長 小柴 憲一

誰もが過ごしやすく居場所のある学校づくりのための生徒会活動

私は令和6年度学校経営方針において、以下のように記載しました。

いじめの未然防止のための一環として、生徒会で仮称「いじめ撲滅運動」を展開し、いじめ行為をしにくい雰囲気を作りあげるとともに、いじめ行為への同調者や傍観者をなくし、「教員へ報告する」という行動が当然の行為としてできるようにしていく。

いじめ行為とは、一定の人間関係を含んでいる学級や部活動などの集団の中で起きます。それはいじめ行為をしやすい雰囲気か、あるいはいじめ行為をしにくい雰囲気かによって結末は大きく変わってきます。

いじめ行為をしやすい集団とは、見て見ぬふりをする人が多かったり、いじめ行為を見て笑ったりして同調する人が多かったりする集団です。また、そのような集団では、「あれはやり過ぎだ」「あれはいじめだ」と心の声は叫んでいても、行動に移すことがとても困難になり、いじめ行為は助長されていきます。

一方、いじめ行為をしにくい集団とは、いじめ行為に発展しようとしたときに「それはやり過ぎだよ」「〇〇さんの何が悪いの?」と、その行為を指摘する行動があったり、それを見ている人も決して同調せず、いわゆる白い目で見たり、心に傷を負った友達に寄り添って「私たちが一緒だから大丈夫だよ」と声をかけたりする集団です。また、そのような集団では、集団の望ましくない状況を担任や顧問などの教員に報告する子どもがいて、早期に教員の指導が入り、ことが大きくなるのを防ぐことができます。

そこで、生徒会本部では、いじめ行為がなく過ごしやすい学校づくりをするため、スローガンを作成し中央委員会で承認を受けた上で、7月8日(月)の生徒会朝礼で丸谷生徒会長から全体に対して以下の呼びかけをしました。

先日の「いじめ調査アンケート」の実施を受けて、生徒会本部を中心にいじめ撲滅運動を行うこととなりました。

スローガンは「いじめの視聴者をなくそう ～画面の先の話じゃない!～」です。

設定理由は、いじめの傍観者や同調者をなくし、いじめが起らない雰囲気をつくっていく必要があるためです。一人一人が、生徒会の一員としていじめ視聴者にならないよう行動して下さい。

生徒会本部は、区立学校全体で実施したアンケートの調査結果がどうであったかは知りません。

しかし、教員がアンケート調査を実施して、いじめ行為があった、あるいはいじめに発展するような言動があるなどを把握する以前に、自分たちの力でいじめ行為が起きない学校にしようという心構えなのです。

とても力強い生徒会本部であり、的を射たスローガンとその設定理由だと思いました。

今後、2学期に向けて、各委員会などを動かして、さらに具体的な行動計画と実践が出てくることと思いますが、このようにすることにより、いじめ行為はゼロにはならなくとも減少していくのです。

パリ 2024 パラリンピック

令和2年開催が予定されていた東京オリンピック・パラリンピックが、新型コロナウイルス感染症の影響で1年延長し、令和3年になったため、3年間隔のオリンピック・パラリンピック開催となりました。開催地はすでにご承知の通りフランスの首都パリです。

オリンピックの開会式直前となり、オリンピック開催地の様子や各競技の日本代表出場選手・チームのメダル獲得の可能性などについて、盛んに報道されていますが、オリンピックは7月26日(金)から8月11日(日)までの予定です。

今回は開催地パリとの時差があるためライブで観戦するというのがなかなか難しいとは思いますが、日本を始めとする各国のアスリートたちの活躍を楽しみにしているのは私だけではないと思います。3年間という短いスパンではありましたが、ここに焦点を当てて調整してきたアスリートたちのドラマが展開されることと思います。

さて、3年前の東京オリンピック・パラリンピックが閉会したあとの、令和3年9月11日付「三中だより No.8」で、私は以下の記事を掲載しました。

東京パラリンピック大会から考えさせられたこと(共生社会の実現のために)

私たちに、多くの勇気・感動・驚きなどを与えてくれた、東京パラリンピックが9月5日(日)に閉会しました。

ひとくくりに障がいといっても、生まれたときから障害があった選手と、突然の事故などにより負った障がいを受け入れて生きていくことになった選手とでは、ここまでの道のりは異なったことでしょう。また、視覚に障がいがある選手・体を動かすことに障がいがある選手・知的障がいのある選手の、それぞれの障がいの種類や程度によっても日々の生活感は全く異なるのではないかと思います。さらに、進行性の難病による障がいの場合、時間の経過とともに障がいの状況も重くなっていくため、できていたことが困難になっていくことについて身体的・精神的な負担を背負い、日々の自分自身との闘いが生活の一部になっているのではないかと思います。

そこでパラリンピックでは、一つの競技でも、障がいの種別や程度ごとにクラス分けなどをして選手たちはその中で競い合っていました。

私は、いくつもの競技を見ましたが、次の2つについて考えさせられました。

1 「ハイポインター」「ローポインター」という用語が普通に使用されている

団体競技の中に、チーム内で障がいの程度が比較的軽い選手が「ハイポインター」、逆に重い選手が「ローポインター」と区別している競技がありました。その競技では、障がいの程度ごとに選手にポイントがついており、障がいの程度が軽くなるほどポイントが大きい数字になり、出場選手の合計ポイントを定められえたポイント以下にしなければならないというルールがあります。ですから、障がいの程度が軽い選手ばかりを出場させることができないのです。

そこで、障害の程度が軽い「ハイポインター」は機敏に動きポイントを多くとったり、ポイントをとった後もすぐに守りについたりしていました。一方、障害の程度が重い「ローポインター」は仲間の「ハイポインター」が攻めやすくするために走路を確保したり、相手の「ハイポインター」が攻撃しにくくなるような場所に移動したりしていました。

一瞬、「ハイポインター」「ローポインター」と聞くと、「高い」「低い」と差をつけているようにとらえてしまいがちですが、チームの中では、それぞれの選手が自分の役割を受け止めており、それらの「ハイポインター」「ローポインター」という用語に対して抵抗感を感じている様子は全く感じられませんでした。

しかし、私たちの日常生活で、もし障がいのある方と身近な関係で生活をするようになった場合、障がいのある方に「あなたはこの役割をお願いします」とはなかなか言いにくいことだと思いますし、一つ間違えると重大な差別的な発言になってしまいます。

パラリンピックに出場しているチームが、「ハイポインター」「ローポインター」を自然に受け入れているのは、「チームとしての目標があること」「すべての選手がそれらを共有していること」

「一人一人が目標を達成するための自分の課題を認識していること」の3点があるからだと考えました。

私たちの生活に当てはめた場合も同じではないでしょうか。「組織としての目標があること」「組織を構成するみんながそれを目標とすること」、そして「自分が目標を達成するために組織に貢献できることはこれだ」という認識があること」の3点を柱に組織づくりをしていくことが重要であり、「共生社会」をつくっていくのなら、社会すべてにその考え方がなければ実現は困難だということにたどりつきました。

2 知的障がいある選手が出場する競技にはクラス分けがない

同じ知的障がいでも、選手それぞれには知的機能の困難さが異なります。また、ADHDや自閉症などの発達障がいや、抑うつや双極性障がい、不安障がいなどの精神疾患を併発している選手もいたようです。

ですから、ある選手がフライングをして棄権になったときに、他の選手の中で突然落ち着きがなくなってしまう、ある同じ行動を何回もしながらようやくスタート位置につく場面や、1日のレースのスケジュールが予定通り進行しなくなってパニックになった選手がいたなどのことがありました。選手一人一人が感じる困難さが異なるのに、「知的障がいのある選手のクラス」として一律に競技をすることに抵抗を感じましたが、あまりにも一人一人の選手の特徴が多すぎてクラス分けすること自体が困難だからそうしているのではないかと考えてみました。

私たちの通常の生活では、知的障がいのある方だけではなく、ADHDや自閉症などの発達障がいや、抑うつや双極性障がい、不安障がいなどの精神疾患のある方とはかなりの高い頻度で接しているはずです。しかし、見ただけ、少し話ただけでは気付けないことが多いことと、それらの障がいや疾患による特徴が表れるのは本人にとってはきっかけがあっても、周囲にとっては予期しないときが多いため、実は本人がとても混乱している、強い不安感に陥っているなどのように理解しにくいことがあります。また、特徴の表れ方が、周囲にとって攻撃的な言動と受け止められてしまう場合は、本人は困り果てたうでで出てしまう言動だとしても、周囲の人を脅かすことになってしまうだけではなく、逆に攻撃し返されてしまう場合もあります。障がいや疾患の理解ができていない「子ども」の場合は、後者のように攻撃し返してしまうことがどうしてもでてきてしまいます。

そのような点から考えると、「共生社会」をつくっていくためには、私たちは知的障がいだけではなく、様々な発達障がいや精神疾患などについて知識を習得するとともに、それらの方々が「今どのようなことで困っているのか」「どのようにすれば困らないようになるのか」というように、積極的に理解しようとしていく必要があり、社会すべてにその考え方がなければ「共生社会」の実現は困難だということにたどりつきました。

今回「障がいのある方との共生社会」について考える機会となりましたが、今では「共生社会」といえば、人種・国籍・言語・文化・性・年齢など様々な違いのある人々が、すべて分け隔てなく暮らしていくことのできる社会を意味するようになっていきます。しかし、今回たどりついた考え方の2点は、いずれも、それらの共生社会の構築にも共通することであり、必須のことです。

閉会式で、2017年から、インクルーシブな世界の実現のために全世界で力を入れてきた「I'm POSSIBLE」の表彰において、「LEARN ENGAGE INCLUDE(学ぶ・取り組む・誰もが一緒に)」のキーワードが紹介されたとき、私の考え方の妥当性を感じました。

これからの多様性と調和が尊重される時代を生きていく子どもたちには、その考え方に基づき、「共生社会を実現してほしい」と校長として強く思いました。

パリパラリンピックの開催は、8月28日(水)から9月8日(日)が予定されており、子どもたちにとっては2学期にも突入してしまうため、なおさらライブでの観戦は困難だと思います。それでも、夕方から夜にかけての再放送やダイジェストなどを見させることにより、共生社会の実現を夢見る子どもたちが出てきてほしいと強く願っています。

国際パラリンピック委員会(IPC)は、パラリンピックに出場するアスリートたちがもつ力こそが

パラリンピックを象徴するものであるとして、以下の4つの価値を掲げています。

- (1) 勇気…マイナスの感情に向き合い、乗り越えようとする精神力
- (2) 強い意志…困難があってもあきらめず、限界を突破しようとする力
- (3) インスピレーション…人の心を揺さぶり、駆り立てる力
- (4) 公平…多様性を認め、創意工夫をすれば、誰もが同じスタートラインに立てることを気付かせる力

オリンピックに興味・関心をもつのはとても良いことですが、是非、パラリンピックにも注目させ子どもたちの心の中に、オリンピックでは味わえない感動がわき上がってくるとともに、何かを感じ取り考えてもらうことを期待しています。

お知らせ

- 第40回荒川区中学校総合体育大会卓球の部において、以下の成績を収めました。
男子シングルス第3位 廣橋 拓海(ブロック大会に出場しました。)
男子シングルス第5位 荒巻 大和(ブロック大会に出場しました。)
男子団体 第3位
- 第40回荒川区中学校総合体育大会ソフトテニスの部において、以下の成績を収めました。
女子団体 第3位
- 第40回荒川区中学校総合体育大会バドミントンの部において、以下の成績を収めました。
男子シングルス第1位 杉谷 天稀(ブロック大会に出場しました。)
男子シングルス第3位 越前谷 大希
女子ダブルス第3位 和氣 仁香・小池 帆夏 組
男子団体第2位(ブロック大会に出場しました。)
女子団体第2位(ブロック大会に出場しました。)
- 7月13日(土)に開催された「汐入ふれあい館なつまつり」に、以下の子どもたちがボランティアとして応募しました。
1年 井上 日渚、中尾 颯一郎、林 亜美佳、潘 欣怡、河野上 大嘉、渋谷 光、宮下 遙、井波 紗和、松田 悠矢、石井 諒佑、児玉 こまち、村上 丈琉、大崎 結斗、増岡 紡
2年 鈴木 萌花、作佐部 希咲、瀬田 知花
3年 佐々木 元、澁谷 厚ノ輔、末岡 星七、山賀 瑛斗、渡辺 那由、山西 純世、木下 心愛
- 第77回東京都中学校陸上競技選手権大会において、以下の成績を収めました。
男子2年 100m 第8位 記録 11秒72 水谷 朝陽
- 8月25日(日)に開催される「汐入まつり」に、以下の子どもたちがボランティアとして応募しました。
1年 荒井 理空、掛川 大輝、米村 陽、長谷川 快、金 明奂、石井 諒佑、今井 葉菜、桑田 昊空、児玉 こまち、高屋 沙奈、大友 沙耶
2年 大霜 優姫、丹野 綾音、前田 万葉、落合 望々子
3年 片倉 湊智
- 9月8日(日)に開催される「わくわくまちあるきたんけん隊」に、以下の子どもたちがボランティアとして応募しました。
1年 中尾 颯一郎、林 亜美佳、潘 欣怡、河野上 大嘉、長谷川 快、井波 紗和、猪野塚 愛佳、石井 諒佑、桑田 昊空、児玉 こまち、青山 莉可、大友 沙耶
3年 伊藤 あかり、桑田 悠愛、末岡 星七、高田 百花、下野 紗和、佐々木 友花、中尾 柑椰